

Mix Days ~Everybody
Needs Somebody~

炉心

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

繋がり方は人それぞれ。繋がり方も人それぞれ。

笑ったり、泣いたり、悩んだり、怒ったり——そんなお話をいろいろと。

複数主人公によるオムニバス形式シリーズです。

注意

その①：展開上、時系列や設定等はアニメ版やグルミクが混じった上に一部オリジナル設定が多数あります（共学化など）。

その②：各話のサブタイトルが適当です。書いてる時に偶然聞いていた曲です。話の

内容とは基本的に関係ないのであしからず。

目次

Andante Mix	〜今夜はプ
ギー・バツク	〜
Scherzando Mix	〜in
cl.	〜
Scherzando Mix	〜じよ
いふる	〜
Andante Mix	〜シュガ
ソングとビターステップ	〜
	45

Andante Mix
〜今夜はブギー・バック〜

草木も眠る丑三つ時。

想定外に長引いたバイトからようやく帰宅を果たし、愛車を車庫に入れて被っていたヘルメットを外した茅^{ちがや}だが、その時間帯にしては少々不自然な感じの明るさに首を捻る。

光源を探して外に出てみれば、夜空の月星と点々と灯る路地の外灯とは別にお隣宅の二階のある部屋の窓が目に入る。カーテンが半分くらいしかひかれていないせいだ煌々とした明かりが漏れているのが確認できた。

「まだ起きてるのか？ 明日……いや、もう今日か。日曜だからまだいいけど、それでも流石に夜更かしのし過ぎじゃないのか？」

部屋の主である子の年齢を考えれば流石に眉を顰めなくなる時間帯。健康面でも美容面でも推奨はできない。

「スイッチが入って時間が経つのを忘れるくらいのもり込む気持ちはわかるけど」

自身の高校時代を思い返して苦笑する。イベント前には仲間達と一緒にあれやこれ

やと夢中になり、気がつけば夜明けだったなんてことは往々にして間々あった。

「……遠い昔な気がするな」

高校を卒業して約1年弱。高校時代とはまるで勝手の違う大学生活やらバイトやらで過ぎ去る日々。そこに慌ただしさだけではない時間の流れを感じる。

「つて、何を感傷的になつてんだ俺は。——うん?」

深夜に一人でセンチメンタリズムに浸るなんてこつぱずかしい真似をしている自身に苦笑し、バカなことをしてないでさっさと寝ようと思ひ立つた矢先だった。

見上げていた先、明かりの点いた窓の奥に人影が見えたかと思うと、次の瞬間には窓が開かれて部屋の中から見知った顔の少女がその姿を覗かせる。

気分転換なのだろう。夜の空気を吸い込み、凝った体を解すべく伸びをしているジャージ姿の少女。一通り屈伸を終えると、特に意味もないのだろうか周囲に視線を巡らして——視界の下の方へと巡ったところで茅と視線が合った。

(よっ!)

深夜なので心の中でだけで実際には声に出さず、その代わりとして茅は軽く手を振り上げて挨拶と自身の存在をアピールを行う。

「ち、ちがやにいっ!?!うむうん!!」

まさか誰かいるとは思ってなかったのだろう。予想外の存在を確認し、思わず叫んだ

少女は慌てて口元を抑える。

「だ、大丈夫なのか？ 何か悪いことしたかな？」

無意味に顔を左右に何度か降った後、焦った様子で部屋の奥へと引つ込んだ少女の様子に思わず苦笑を禁じ得ない心持ちになる。

「メール？ 誰だ？」

不意に振動した自身のスマホがメールの着信を告げる。

確認すると、今しがた雲隠れしたばかりの少女の名前でのメール。

その内容は、

《今すぐいかやちよつと待ってえ》

「?? ああ、『今すぐ行くからちよつと待ってて』か」

かなり慌てて打ったからだろう、多少の誤字があったが内容は分かった。

夜も更けているので別にわざわざ出てこなくてもいいよと、その旨をメールで送ったのだが何故か既読がつかない。

(まあ、いいか)

相手は流石に幼い子供というほどの年齢でもない。久し振りに少し話をするくらいなら問題ないだろう。その上で一応は年長者として対応すればいい。

「……遅い」

少女の家は目の前である。その二階にある部屋から階段を下りてきて茅のいる玄関先に来るまでにかかる時間とはどれくらいだろうか？

10秒？ 20秒？

『すぐ』とメールでは言っていた。『すぐ』の時間的範囲は人や状況によって多少の違いはあるだろうが、それでも今の状況ならば多く見積もっても1分はかからないだろう。

だが、既に3分程経過したにも関わらず少女は一向に出てくる気配がない。

「何かあったか？」

こうなると逆に不安になってくる。焦ったあまり階段を下りる時に転倒して動けなくなつたなどという最悪な状況すら想定してしまう。

「この時間帯にチャイムを鳴らすなんて真似はしたくはないんだが……あと1分が限度かな？」

隣家の住民全員を深夜に叩き起こすことに繋がるやもしれないが、それも致し方ない。

(あと30秒。29、28、27、26——)

「お、お待たせ!!」

勢いよく開けられる玄関扉。

黄色のメッシュが目を惹く髪を少々振り乱しながら出てきた少女の姿を確認し、茅のカウントダウンと心配は幸いにも無駄に終わる結果となった。

(あれ?)

一瞬感じた違和感。よく見ればすぐにその正体は分かっただが、相手が年頃の女の子であることを考えればなんとなく察することもできたので、敢えて指摘はしないことにする。

「こんばんは。真秀」

「こ、こんばんは。ち、茅さん」

茅にとつては数年来のお隣さんである明石家の長女である年下の少女——真秀は少々乱れ気味の息を整えながら挨拶を返してくる。やはり出てくるまでに何かあったのか、外灯と玄関の夜間照明に照らし出されたその顔は心なしか頬が薄く朱に染まっただけに見えた。

「随分と遅くまで起きてるんだな? 休みの日とは言え、夜更かしはあまり褒められたものじゃないぞ。高校生」

「え、えくと、ちよつと色々と作業をしてたんですけど。気がついたらこんな時間になつてて」

「好きなことに夢中になるのはいいこと——つと言いたところだけど、それでも『気が

「ついたら倒れてました」ってことにならないようにな。ある程度でキリをつけて、無理しちまう前に終われるようにはしとけ」

「うん、気をつけます。って、そう言う茅さんこそこんな時間にどうして外に？」

「俺？ 今ちようど帰ってきたところ。バイトが少し長引いてさ。まあ、バイクだったからこの時間でも帰ってはこれたけど。そうじゃなかったら確実に始発電車で朝帰りコースだったよ」

茅は手に持っていたバイクのキーを見せながら苦笑する。

「その……お疲れ様」

「ありがとう」

心配そうな表情を浮かべる真秀。素直で優しい性格の一端が垣間見えるその様子に、茅は思わず内心で一瞬前とは別のタイプの苦笑を漏らす。

「それで、こんな時間になるまで夢中になってた作業の方はもう終わったのか？」

「う、うん。さつき一区切りがついたところで」

「そうか。なら、俺のタイミングが悪かったな」

作業終了の気分転換に窓から顔を出してみたら、そこに偶然にもいた茅が変に存在をアピールしたせいでわざわざ気を遣って出てくる羽目になったのだろう。

（時間も時間だし、あんまり引き留めるのもアレか）

「じゃあ、これ以上の夜更かしはお互いの美容と健康の為にも止めとくとするか。春とは言っても夜はまだまだ冷えるし、暖かくして寝るように」

年長者の茅を差し置いて先に家に引つ込むのは流石に気が引けるだろうと予想し、先手を打って話を切り上げることにする。

「おやすみ〜」

茅自身既に結構眠いのも事実なので、沸き上がる欠伸を噛み殺しながら踵を返すと、自宅の玄関へと向かう。

「あっ」

微かに聞こえた気がする小さな声。

その次の瞬間、茅の上着の端が何者かに引つ張られる。

（何だ?）

反射的に振り向いた茅だが、その視界に予想外の光景が映る。

「あ、あの……」

伸ばした手で真秀が茅の上着を掴んでいた。その顔には咄嗟のことで本当に思わずと言った表情を浮かべている。

「——ッ、ッめんなさい!!」

すぐに自分が何をしているのか気づいたのだろう。瞬時に顔を赤らめた真秀は慌て

て茅の上着から手を放す。見た目がボーイッシュな印象の強い真秀だが、その様子は妙に可愛らしかった。

そして、そんな姿を見せられては少々絆されてしまうのもある意味仕方ないことだった。

「……そうだな。長引いたバイトで疲れたことだし、寝る前に少し甘いものが飲みたい気分だな。よし、真秀。その自販機で何か買って飲むけど、よかつたら少しだけ付き合ってくれないか？ 真秀は何が飲みたい？ 何でも好きなものを言ってい。付き合ってくれるお礼に茅兄ちがやにいからの奢りだ」

茅は数軒先にある自販機の方を指差すと、幼い頃の真秀からの呼び名であった『茅兄』の呼称を敢えて使ってお道化てみせる。

「それじゃあ、ミルクティーを」

「オーライ。流石にこの時間にコーヒーはアレだし、俺も同じのにするかね」

茅の態度に顔を綻ばせた真秀に「小父さん達には深夜に俺が家から連れ出しことは内緒にしといてくれよ」と言つて更に破顔させると、二人連れだつて自販機のある場所へと向かう。

「ほら、ホットでロイヤルなミルクティー」

真秀の分を手渡し、茅自身はアイスでノーマルなミルクティーを一気に缶の半分近く

まで飲み干す。

「そう言えば高校生活はどうなんだ？ 楽しくやってる？」

「なんだか久々に会った親戚のおじさんみたい」

「あゝ、言われてみれば確かに。ま、気にするな。で、どうなんだ？ 念願のDJ活動はしてるんだろ？」

真秀の通う陽葉学園は音楽や芸術に力を入れており、特に学生間のDJ活動は本格的でありそれなりに以上には有名だ。真秀も幼少時に見たDJに憧れ、その憧れを現実にしようとしていたのを茅も聞き知っている。

この春に高校進学から既に2ヶ月弱。ちよつとした個人的な情報源から実は真秀についての多少の情報は得ていた茅だが、今はそのことは特に言わないでおく。

「とりあえず、お昼の放送での週替わりのDJ活動に少しずつ参加させて貰えるようになって。今はそれを頑張ってます。まだまだ全然これからなんですけどね」

「そうか、頑張れよ。陽葉学園のDJ活動や音楽活動のレベルは無茶苦茶高いつて聞くと、そんな場所で頑張ってる凄い子達が大勢いる中で活動していくのは大変だろうけど」

「そうなんだ。私もビックリしているんだけど。本当にレベルが高くて。特に同じ1年なんのにもう校内ラングの上位にいるユニットがあつて。その子達は中等部の頃から

活動してるんだけど、トラックメイキングもセンスも歌も曲もダンスパフォーマンスも全部凄くて。上級生を差し置いて今年の陽葉祭のサンセットステージでも優勝するんじゃないかって噂が立つくらいで。私もライブを何度も見たんだけどとにかく——」

茅の出した話題は見事に真秀の琴線に触れたのか、それまで多少構えていた真秀の敬語気味の口調が一気に崩れる。スイッチが入ったのか、口から出る語りが止まらない。

「——あつ。ご、ごめんなさい！」

「いや、いいよ。と言うか、真秀にさつきからずつと言おうと思っていたんだけど。真秀の口調。それ、無理に敬語を使おうとしなくてもいいからな。別に見ず知らずの相手つてわけじゃないんだから。『親しき中にも礼儀あり』を大事すること自体は良いことだとは思うが。まあ、いろんな建前はともかくとして。俺としては違和感があるからできれば普通に話して欲しところなんだが」

「それは……そうだよな。久し振りに茅兄いと話したからかな？　なんか緊張しちゃって」

「久し振りって、そんなに話してなかったっけ？　あくでも、俺も最近は何かとバタバタしてたからな。ちよつとした挨拶とかを別にしたらこんな風にゆつくりと話したのは真秀が高校に行く前くらいか。でも、それでも精々3ヶ月くらいなもんじゃないか？」

「3ヶ月も。だよ」

素が出たことで今更取り繕う無意味さを悟ったのか、ようやく普通に喋るようになった真秀に笑顔を向ける茅。真秀本人は自覚がないようだが、『茅兄い』と昔の呼び方になっている点に関しては敢えて指摘しない。

「なんにしても、意味のない気遣いはしなくていい。どうにも真秀は昔から背伸びしがちなところがあるからな」

「ち、茅兄い！ こ、子供扱いしないでくれるかな！」

「ははは、わるいわるい」

幼少期から真秀のことを知っている茅としては無意識の内に子供扱いしてしまうことがある。一目見れば成長は明らかであり、特に一部の身体的特徴部分はもはやその辺の大人顔負け具合の成長が見て取れるのだが……流石に確実にセクハラになるので言うこともないし視線もあまり向けられないように注意しておく。

(にしても、真秀がもう高校生か)

月日の流れの早さを感じて妙にしみじみする。

「今思えばだけど。俺、真秀の高校進学のお祝いって何もしてなかったよな？ 今更だけど何かしようか？ 何か欲しいものとかがあるなら……って、当然DJ関連の機材とかに決まってるか。俺は正直言ってあんまり詳しくないんだが……誰か……カノンとかにでも聞いたほうがいいのか？ でも、そもそもあまり高くなるようだ……いや、

バイトの回数を少しくらい増やせばある程度なら……」

「え？ い、いいよ！ そんなのいらぬから！ 今こうして飲み物も奢って貰ってるしや」

茅の発言に何か高いもの送られるかもと感じたのだろう。真秀は慌てた様子で両手を降ると、次いで手にしていた缶を指し示しながら遠慮してくる。

「それに、茅兄いからなら別にものじゃなくても……」

不意に顔を隠すように俯いた真秀が何やら呟いているが、吹き出しが小さ過ぎて茅にはよく聞き取れなかった。

「うくん、でもなあ。自販機のミルクティー程度でお祝いを済ませましたってのは流石に……じゃあ、ケーキでも食べに行くか？ 俺の奢りで。それくらいならいいだろ？」

「ケーキ？」

「ああ。最近知り合いにお薦めされたモンブランが超絶美味い店があるんだけど——」

「行く」

「おお、食いついたな」

好物の名前は効果抜群だった。

パブロフの犬の如く即座に反応した真秀の様子に茅は思わず吹き出してしまふ。女子高生にとって甘い物の名前はやはりキラワードらしい。

「言質を取ったし、行くなら早い方がいいか。真秀はいつだったら空いてる？ 高校生と違って大学生ってのは時間の融通が結構利くからな。いつだっていいぞ。なんなら明日……じゃなくて今日でもいい。ちやうど日曜だしな」

「今日……」

「そう、今日。つて、流石に急すぎるか」

「今日。今日……あ、でも午前中に……。いや、昼頃には……うん。大丈夫。大丈夫。今日でいいよ」

一瞬だけ思案顔を浮かべた真秀だが、すぐに考えは決まったようだ。

「えーと、本当に大丈夫か？ 俺も流れで言っただけだから、何か予定があつたのなら別に無理しなくてもいいからな？」

「ううん。大丈夫。ちよつと午前中に用事で学校に行くつもりだったから。それが終わった後なら時間あるし」

「本当に大丈夫か？」

「うん。用事が終わったらメールするから」

「そうか……。なら決まりだな。んじゃ、さつさと寝るとしようか。てか、実はこれ以上の夜更かしは流石に俺もう限界だ」

真秀が茅には見えないように欠伸を噛み殺していたことには気づかないふりをしつ

つ、茅は自身が軽く欠伸をして眠気の限界をアピールする。

互いに飲み干して空になった缶を自販機横のゴミ箱に捨てると、外灯と月明かりに照らされた路地を肩を並べて家路につく。

「ところで真秀。ちよつと気になってたことなんだけど……その羽織つてるパーカーって、学校指定のヤツなのか？」

「違うけど……どうして？」

「いや、特にどうというわけではないんだがな。そうか、違うよな」

シンプルな柄のパーカー。それほど派手ではないシャツとハーフパンツという姿。お洒落していると言うほどではないが、それでも学校指定のジャージ姿という明らかに部屋着モード全開な姿ではない。茅は確信する。つまり、やはりそれは……

「——あつ」

茅の言外の意図に気づいたのだろう。瞬時に真秀の顔が耳まで真っ赤に染まる。

「お、おやすみ!!」

次の瞬間、脱兎の如く駆け出した真秀は自宅の玄関扉へと駆け寄り、最後に一瞬だけ茅の方を向いて頭を下げると、すぐにその姿は扉の向こうへと消えてしまった。

「あゝ、少しデリカシーが無さ過ぎたかな？」

最後の最後で自身の言動の軽はずみさを鑑みて反省をする茅だが、すぐに「真秀の可

愛い姿が見れたからまあいいか」と後悔はしないことにした。

「おやすみ、真秀」

最後に見せた真秀の可愛らしい姿の余韻。それだけで不思議と良い夢が見れそうだなと思いつながら盛大な欠伸をした茅は、起きてからの予定をつらつらと考えながらも自身もさつさと寝るべく我が家へと入っていく。

家に入った後はすぐに自室のベッドへと直行した茅。それ故に、気づかなかつた。

早々に茅の家の照明が消えたのと異なり、明石家の照明がその後も少しの間消えずにいたことに。

そして、

「やっっちゃった。やっっちゃたよ、私。何やってんだよ、私。てゆうか、普通に気づかれちゃってるじゃん。恥ずかしすぎだし。ああ、もう。はああああああ」

閉じた玄関扉に背を預けて蹲り、しばしの時間を盛大な後悔と羞恥とその他もろもろな感情に翻弄され、いろいろとモヤモヤした状態でのなかなか複雑な夢見になりそうな状態になっている真秀がいたことに。

Scherzando Mix Sincle S

「ヤバイ。ひつじよくに、ヤバイ」

高校入学から約1ヶ月ちよつと。來栖くるす 紘汰こうたは非常に重大且つ危機的状况に直面していた。

勉強三昧の受験が終了し、晴れて念額の高校入学が決まってから浮かれまくって過ぎてきたが、早くもその付けが回って来ていたのだ。

間もなく迎える恐怖の試練。その名は——中間テスト。

ピンチである。

超絶にピンチなのである。

「なので大鳴門さん。いえ、大鳴門様。助けてください。お願いします」
「はあ? 何言ってるの?」

時刻は放課後。

場所とはあるモダンな雰囲気漂う喫茶店の店内。

平伏して頼み込んだ相手は明らかに困惑した目で銀汰を見てくる。当然であろう。

何せ迄入学して一ヶ月ちよつとなのだ。範圍的にも中学のおさらいと多少新しい範圍に入った程度。勉強に白旗を上げるにしても少々早すぎる。

「数学がね。ヤバいんです。いや、ホント。マジで。全然わかりません。高校の数学ってこんなに難しいの？」

だが、そこは人それぞれ。そして、紘汰にとつて元々それほど得意でもなかった数学は春休みの受験ボケと入学後に少し調子こいてサボっていた間に一気に理解不能な領域へと突入していたのであつた。誰のせいかつて？ 自業自得ですよ。

「バカなんじゃないの？ むしろ、普通にバカになつてるのよね？」

「返す言葉ありません。と言うことで、数学が得意な大鳴門むに大明神様。教えてくください。ホント、お願い」

「ほ、他の子に頼んだらいいじゃない。わたしは別のクラスなんだし。紘汰のクラスにも、と、友達くらいいるでしょ。あと、その変な喋り方はやめて」

（あく、わたしつてばバカ！ なんでこんな嫌な言い方をしちゃうのよ！）

紘汰が必死に助力をお願いしている相手——大鳴門むにと言う少女は少々素直じゃない性格をしていた。その為、内心で思っていることとはまったく逆の言葉をつい口から出してしまい、口に出した直後に後悔することが間々あつた。

「いやいや。入学してからまだ一ヶ月だけ。むに以外に同じ中学からの知り合いもいな

いし。クラスの奴等とも多少打ち解けたレベルで、まだまだ〃これから仲良くなつていこうぜ〃的な状況なわけじゃん。そんな状況の中でいきなり勉強を教えてくれとか、『え？ こいつバカなの？（？m？〃）プププッ！』つてなるだろ。クラスでの俺のイメージがバカキャラで固定化決定じゃんか」

「事実でしよ」

現在進行形でむにの中ではすでに絃汰のイメージがバカキャラになっている。

「あんたの先輩に頼んだらどうなのよ？ 大学生の先輩。受験勉強の時にも少しだけ家庭教師をして貰ったつて聞いているし、わたしよりもよっぽど教えるのにも向いてるでしよ」

「それは無理。絶対に無理」

「どうしてよ？」

「男のプライド的な問題」

「何よそれ？」

「色々あるんだよ、男の子には。とにかく！ 今の俺にはむにだけが唯一の砦なんだ

！ 希望の光なんだ！ 頼む！」

「わ、わたしだけ……」

両手を顔の前で合わせ、目の前のむにを拝むようにして再び頭を下げる絃汰。言動自

体のあれやこれやはともかくとして、その様子はなかなか情熱を感じさせるものだった。

「そう、むにだけ!!」

「わたしだけ……わたしだけ……。ま、まあ、仕方ないわね。紘汰がどうしても言うんならね。このむにちゃんが特別に教えてあげてもいいわよ」

何やら一瞬間を盛大に赤らめてトリップしていた様子のむにだったが、必死に頭を下げ続けている紘汰がそのことに気づくことはない。

「本当か!? さすがむに! 友達を見捨てない優しさがある! そこにシビれる! あここがれるウー!」

「何よそのネタまみれのセリフは」

「二度使ってみたかったんだ。でもって、今の俺の感動を表現するにはもうこのセリフしかない!」

呆れ顔で己を見てくるむにの視線などなんのその。見事に勉強の協力を取り付けた紘汰にとって今や大抵のことは些細なことではしかなかった。

「これで俺は乗り切れる! なんとかなる! 待つてろ、来週の間テスト。お前なんか目じゃねぜ! なにせ俺には救いの女神がついてるんだからな。いや、感謝感謝。感謝でござる!」

「勉強する前からよくそんなに自信満々でいられるわね」

「人生はポジティブ！それが俺の座右の銘だからな」

「初めて聞いたわよ」

「当然。今考えたからな」

「あつ、そう。まあ、何でもいいけど」と呟き、むには氷が融けて少し薄くなったレモンティーに軽く口をつける。

「それで、いつ勉強するの？もうあんまり時間はないけど？場所は？」

「マジで時間が無いしな。できれば今日からしたいな。場所は……学校の図書館とかでいんじゃない？」

「ええ。嫌よ」

『学生が勉強する場所』 Ⅱ 『学校の図書館』という安直な思考で答えた絃汰だったが、何故か露骨に嫌そうな表情をしたむにから即座に却下をくらう。

「なしてよ？あ、もしかして今から学校に戻るのがメンドクセーとか？」

「それもあるけど。でも、それだけじゃなくて……」

「??？」

要領を得ないむにの言葉に首を捻るしかない絃汰。

（だって、学校の図書館なんかで2人で勉強なんかしてたら目立つじゃない！ただで

さえ男子が少ない学校なんだから！」

むにとしては目立つこと自体は嫌ではないが、悪目立ちすることは避けたかった。

「と、とにかく。学校の図書館は却下よ。却下。するならどこか別の場所で」

「だったら……このままこの喫茶店ですか？ でも、俺はこういう場所だと勉強してもあんまり身に入らないタイプなんだよな。なんか気が散るといふか。できなくはないけどさ」

よく喫茶店でパソコンを広げて仕事をしている人を見かけるが、「気が散らないのだろうか？」と思う。それとも、世間一般的には紘汰のように気が散る方が少数派なのか。しばし考え込んだ紘汰の頭の中に浮かんだ幾つかの候補。その中から一番無難そうな場所となると。

「もう、いつそ俺の家でしちまうか」

ボソツとした呟きに近いものだったが、目の前の人物には聞こえたようだ。

「えっ……ええええええええっ!」

「つて、むに！ 声！ 声がデカい！」

周囲にいた他のお客や店員が思わず振り返るレベルの音量に慌てて制止をかける紘汰。むにの方もすぐに気がついて口元を両手で抑える。

周囲の人に愛想笑いを浮かべて誤魔化すと、お互いに身体を縮こませてその場をやり

過ぐす。

「ビックリした。何で急に叫んでんだよ？」

「あ、あんたが突拍子もないことを言うからでしょ」

「え？ 俺が？ 俺、何か突拍子もないことなんか言ったか？」

若干頬を赤らめたむにからの非難交じりの言葉と視線を受け、身に覚えがない絃汰は意味が分からず混乱する。

「い、家でするとか……いきなりそんなこと言うから……」

視線を逸らし、頬の赤みを秒刻みで増しながらの呟き。

(な、何だやさあ？ この可愛い生き物は？)

むにの妙に可愛らしい様子に絃汰の思考が一瞬あさつての方向に行くが、それはそれとしても言われていることの意味には遅ればせながら気づく。

絃汰とむには中学の同級生である。そして、それなりに仲の良い関係ではある。だが、あくまで友人同士であつて彼氏彼女として付き合っているような間柄なわけではない。複数人を交えてならともかく、2人きりで家で勉強するというのは少々問題が発生しそうな気がするようないような。

(いやいや、何もしいけどね！ むには可愛いけど、あくまで友達だし)

むには傍から見ても非常に愛らしい少女ではあるが、それが恋愛感情に繋がるかと言

ええ否である。何より、絃汰は今のむにとの友情を壊すつもりは毛頭ない。

ただ、問題なのは……

「ど、どうしても言うんなら仕方ないけど。でも、わたしとしては初めて行くわけだし。いきなり今日とか。別に本気で嫌ってわけじゃないけど、それでも心の準備と言うか。確かに高校生なんだからそれくらいならとも思うけど。それに今日もママは仕事で家には帰ってこないだろうから、別に遅くなっても全然大丈夫なだけ——」

妙にテンションになっっているのか、結構大きめの音量の声で延々と喋り続けるむにの存在だった。

先程むにが叫んだ影響もあるのだろう。周囲にいる人達の何人かの意識と注目が微妙に絃汰とむにの方へと向けられている気がする中、むにの発する微妙に誤解を生みそうなニュアンスの台詞はいろいろと絃汰にとってマズいものだった。

実際、別に疚しいことをしようとしていたわけでもないのにもかかわらず、絃汰へと向けられる視線の幾つかは確実に誤解交じりのものになっている気さえするのだ。

（あ、ダメだ。これ、今すぐむにをなんとかしないとマジでマズいやつだ）

「や、やつぱさうだよな。今考えれば俺の部屋は汚いし、勉強するって状況じゃなかったわ。ここで勉強しよう。そうしよう」

即断即決。これ以上の被害が発生する前に対処すべく、絃汰は意識的に大きめの声で

もって『勉強』という言葉を主張するようにしながら絶賛トリップ中のむにの意識を引き戻すことにする。

「——え？ あつ、うん。そ、そうね」

紘汰の声に一瞬だけ呆けたような表情を見せたむにはようやく我に返る。

（あれ？ わたし何を言っていたの？ 何か変なことを口走っていたような……）

（あゝ、これは変なことを言っていたかかって悩んでる顔だわ。多分）

押し黙って微妙に無表情になってしまったむに。その様子を紘汰は勝手な想像を膨らませながらただ見守ることしかできない。

「……………」

何とも言えない沈黙が2人の間に横たわる。

お互いのあさつての方向へと視線を彷徨わせながら数分程。

「……じゃあ、勉強する？」

「そうね。さつさと始めるわよ」

微妙な沈黙に耐え兼ね、それを打開すべく少しだけ居心地が悪そうに呟いた紘汰の言葉にむにも頷く。

いそいそと勉強道具を準備した2人は、来たるべき中間テストへ向けて勉強を開始するのだった。

☆☆skit☆☆

「なあ、むに。今日はむにの家のママさんが仕事で帰ってこないって言ってたけど。晩飯ってどうすんの?」

「別にテキトーにするわよ。いつものことだし」

「ふ〜ん」

「……何よ?」

「そう言えば全然関係ないことなんだけどさ。先週くらいに駅前になんか新しくカレーのチェーン店がオープンしたんだよ。知ってる?」

「唐突に何? 知ってるけど」

「俺さ、今ムシヨーにカレーが食べたい気分なんだよね。そいでもってその店は今オープン記念で半額セール中なのさ」

「だから?」

「ああ、もうダメだ。俺のお腹は完全にカレーモードだわ。カレーが俺を呼んでるわ。」

絶対に食べなきゃだわ。てなわけで、勉強終わったら一緒に食べに行かぬ？」

「……紘汰が『どーしても』。『どーしても』このむにちゃんと一緒に食べたいって言
うんなら考えてあげてもいいわよ」

「『どーしても』。俺は『どーしても』むにと一緒にカレーを食べに行きたい」

「……………」

「返答をプリーズ」

「はいはい。わかったわよ。一緒に食べに行つてあげるわよ。感謝しなさいよね」

「おう、サンキュー」

Scherzando Mix ~じよいふる~

(……勝った！ 俺は勝ったぞ！)

長きに亘る辛く厳しい戦い。それに勝利した者の魂の奥底よりの叫びは、たとえ声に出さなくとも全世界に響き渡したいほどに熱いものだった。

「見事、全教科赤点回避。やったぜ」

結果の送られてきた中間テストの成績表のデータを確認し、紘汰は小さくガッツポーズをとる。そして、昼休みに入ったばかりの教室のそこかしこでも紘汰ほどではないにしろ安堵や喜びの声を上げているクラスメイト達がチラホラと見かけられた。

「來栖くん、随分と嬉しそうだね。そんなにテスト結果が良かったとか？」

「お、おう。まあな」

不意に横から声をかけられ、思わず少しもる。

「ポチポチってどこかな。明石さんはどうだった？ テスト結果」

「私もまずまずってどこかな？ 悪くはなかった」

フランクな様子で話しかけてきたのは紘汰の隣の席に座っているクラスメイトであ

る明石さん。明るい黄色のメッシュを入れた短めの髪に幾つものピアスを付けたサバサバした雰囲気のある少女で、その雰囲気もあつてかクラスの男子連中以外では現状で紘汰が一番話す回数が多いクラスの女子でもある。

(明石さん。多分、DJ活動に興味がある……っか、確実に活動する気なんだろうな)

何度かの会話からDJ活動をするつもりらしいことが伺い知れており、自身もこの学校で音楽活動をするつもりでの紘汰としてはもう少しいろいろと話してみたい相手でもあつた。

(と言うか、俺的に結構好みのタイプなんだよな)

流石に口に出して言えるような段階ではないが、ちよつと気になつていたりはそのクラスの男子連中の中でも結構人気があるようなので、下手に口に出すと後が怖いものがあるのだが。

「最初の中間テストとは言え、お互いに赤点にならなくて良かったよね。いろいろと活動ができなくなるし」

「それな」

紘汰達が通う陽葉学園は非常に自由な校風で、音楽や芸術関係にも力を入れているし学生の手その手の活動も推進している。だが、その自由度の高さ分だけ学生の成績に対す

る評価もシビアだ。赤点を取ればもれなく学内での各種活動禁止の勧告を受けることになる。

「——おつ、と。しまった。こつちから話しかけたのにゴメン。少し行くところがあるのを忘れてた」

「ああ、いいよ。俺もそろそろ昼飯を食べに行くつもりだったし」

「そっか。5限目は移動教室だし、食べ過ぎで昼寝なんかして遅れないようにしなよ」

「忠告感謝。明石さんもな」

笑顔で紘汰との軽い掛け合いを済ませて颯爽と教室から出て行った明石さんの後姿を見送ると、紘汰もスマホ片手に急いで購買へと行くことにした。

(さく。さく。さく。さく。と購買行かないとな。報告もあるし)

スマホに着信していたメール。

《結果報告すること！ 北校舎裏のベンチで》

送信者からの当然の権利の要求を受け、義務を果たす必要があった。

「ホント、赤点じゃなくて良かったぜ」

目も当てられない事態にならなくて済んだことに安堵し、スキップとはいかなくても思わず鼻歌を口ずさんでしまうような気分の紘汰だった。

「では、発表します。ドウルルルルルウ」

「いや、そうゆうのはいいから。さつさと教えなさいよ」

「あり？ ノリが悪くね？」

ちよいと小気味いい演出を踏まえつつも勿体ぶった様子で発表しようとした絃汰だったのだが、そこへ浴びせられる冷静なツツコみに肩透かしをくらう。

「お昼休みの時間は有限な上に短い。無駄なことにわたしの貴重な時間を使わせないで」

「やれやれ。むにはエンターテイナーとしての心構えがなっていないぜ。どんな時でも人生は楽しくいかなないと損だと——」

「さつさと教えて」

「……サーセン」

（ヤツベエ。赤点回避で調子に乗り過ぎた）

能面にみいたいな笑顔を浮かべたむにからのマグマも瞬間凍結できそうな冷たい視線を受け、絃汰は即座に態度を改めることにする。

「えーと。とりあえず、無事に赤点は回避できました。ホント、マジでサンキュー。あり

がとうございます」

スマホの画面にテスト結果のデータをコピーしたものを表示し、それをむにが見えるように差し出しながら深々と頭を下げる。

正直言つて成績そのものは鼻屑目に見えても高成績とは言い難く、とても人様にお見せできるようなそれではないのだが、それでも協力してくれた相手には包み隠さず晒すのが信義と言うもの。

「むにが予想していた通り今回のテストは中学の頃の復習が中心の出題だったけど、それでも数学はマジで助けてもらつてなかつたらヤバかった。他の教科も一緒に勉強していたおかげで何とかなつた部分も多かつたしな」

「ふくん。まあ、このむにちゃんが勉強の協力をしたんだからね。赤点回避は当然でしよ」

「マジで感謝。いや、ありがとう。ホント、ありがとう。大事なことなので2度で言います」

自分のおかげで紘汰が赤点回避できたことに気を良くした様子のおむにに對し、一時的に見事な太鼓持ちと化する紘汰。人間褒めそやされば嬉しいもので、むにも紘汰からの感謝の言葉に更に得意気に「そうでしよ、そうでしよ」と言つて相槌を打っている。

「……よかつた」

そんな中で一瞬だけ眩かれた小さな声。安堵したようなその声を、紘汰はあえて聞こえなかったことにした。

「俺のバラ色の高校生活を邪魔する障害も見事突破したし、これで心置きなくいろいろとできるな。もし高校入学後の初っ端の中間テストで赤点とか取っちゃまってたら、また親に禁止令をくらうとこだったからな」

「禁止令?」

「そう、音楽禁止令。正式名はキレた俺の母親による『勉強しろ!』とにかく勉強しろ!

勉強以外完全禁止!』令」

「思い出したわ。なんか去年は一時的にそんな感じになってるって言ってたわね」

「そう。あれは辛く苦しい時代だった。俺にとつての暗黒時代。光のない地下労働施設で酷使されるような日々。自由を奪われ、何一つ許されずに弾^{勉強}圧^潰され続ける毎日」

「原因はあんたでしょ? 確か、成績が壊滅的にマズい状態だったはずよね」

「だが、もう俺は解放されたのだ! 自由を得た俺を止められる者などいない。いや、止められるつもりもない。俺は俺のやりたいことをする!」

過去の悲しくも耐えるしかなかった日々を思い返し、それを乗り越えた先にある希望に満ちた今と未来に向けて力強く息巻いてみせる紘汰。若干むにが呆れた顔をして見ている気がするが、そんなことは一切気にしない。

「忙しくなるぜ。やる気出てきた」

「何？ そう言えば前から何かするみたいなのは言ってたけど、何かするつもりなの？」

「ふっふっふっ。いろいろとな。盛大な野望があるんだよなあ、これが」

格好をつけたいのか、意味深な風を装っている絃汰だが、内心のウキウキを隠し切れずに微妙に顔がにやけている。

（絃汰の言っている『何か』って、多分だけど音楽関係の何かよね？ バンドとか？ 仲が良い先輩がしていて、それにすごく憧れてるとか言っていたし）

中学の時から絃汰から時折聞かされていた話。何をするかの詳細までは聞いていないし、あまり聞きたいとも思わなかった話。

（でも、それを始めるってことは……）

高校生ともなれば中学生時代とは比較にならないほどに行動の自由度が上がる。新しい出会いもあるだろうし、交友関係もより一層広がるだろう。そして何より、新しいことを始めるともなれば当然ながら絃汰がこれからの高校生活で過ごす時間の比重はそちらが中心になっていくことに間違いはないだろう。

（わたしは……）

「それで。いろいろと楽しそうなのはいいけど、その為に勉強に協力したわたしに絃汰

は一体何をしてくれるのかしら?」

あまり歓迎できかねる考えが浮かび、むには堪らず口を開く。

「あれ? 前にカレーを奢ったじゃん」

「何言ってるのよ。あれは絃汰が、どくしても、わたしと一緒にカレーが食べたいって言うから付き合っただけじゃない」

「そーでした」

(あつ。わたし、また嫌な言い方しちゃってる)

「うーん、確かになく。どうすつかなく」

すぐに自分の物言いに後悔するむにだが、言われた方の絃汰は特に気にもしていない様子で何やら考え込んでいる。

「なあ、むに。ちよいと真剣な話をしているか?」

「な、なによ?」

不意に真剣な顔と雰囲気になった絃汰から見詰められ、思わずむには佇まいを正してしまふ。

(え? な、何? 何なの? 急にこんな真面目な顔しちゃって。何を言うつもり?)

微妙に混乱。あと、むにちゃん体温急上昇中。

「正直に言わせてくれ。実は俺……」

少し口を開いたところで言い淀む紘汰。その様子にむには言いようのない焦燥感を覚える。

『『実は俺』？ 『実は俺』って何よ？ まさか変なことを——』

「スマン！ 今はお金がほとんど無い。てか、普通に今月ピクンチ。ちよー金欠モード。いやー、まいちやうよね。あはははははっ」

「……だから？」

むにちゃん体温急降下中。あと、紘汰へ向けた視線の温度も氷点下レベルに急低下。残念ながら紘汰は気づいていないようだが。

「だから、勉強のお礼に何かを盛大に奢るのはちよつと無理っす。月末と来月初めにちよつと知り合いのところでバイトさせてもらえる予定なんで、それ以降ならなんとか……」

「来月とか、随分と先のことを言うのね」

「わかってる。確かに来月は先過ぎだよな。なので……頼む！ 何かお金がかからない方向でして欲しいことない？ 買い物荷物持ちでも、パシリでも、ゲームの超地味レベリングでも大抵のことは何でもするからさ」

これがデジャヴと呼ばれるものなのか。むには先週くらいに見た記憶のある平身低頭なお願い姿勢をした紘汰へと呆れ気味の視線を送る。

(何でも……。何でもするってことはたとえば……。——って、何を意味深に考えてんのよ！ わたしは！)

絃汰の発言に深い意味などあるわけはなく。そんなことは当然ながら理解しているむにはあるが、それでも思わずいろいろと人様には言えないような乙女の妄想をしてみましょう。そして、そんな妄想をした己自身への盛大なノリツツコみを脳内で繰り広げる。

「ま、まあいいけど」

「おー マジで！ よっしやー！ むにさんアリガトウゴザイマース！ んじゃあ、どうする？ 何する？ とりあえず、肩でもお揉みしましょうか？」

むにの温情ある返答に笑顔全開となった絃汰は、両手の掌をワキワキさせながらあからさまなごますり職人と化す。

「セクハラ。通報するわよ」

「ひどっ!! 純粹に感謝の気持ちを実行に移そうとしただけなのに」

「純粹な感謝？ ホントに〜？ なんか絃汰の目が少しだけイヤらしかった気がするんだけどっ？」

「ちよいちよいちよい。ちよちよいのチョイ待ち。心外だぞ。むには俺がそんな奴だと思ってるの!? 肩揉み託けてむにの華奢で繊細な鎖骨の形を指でなぞってうっとりす

るとか、うなじの日焼けしていない白い肌をじっくり舐めるように眺めるとか、髪とかに鼻をバレないように近づけて女の子特有の甘い香りをクンカクンカするとか——俺がそんな変態的なことをする奴だとても？」

「いや、思つてないから」

「そうか。そうだよな。むにはそんな風に見るようなことはしないよな」

「思つてなかつたけど、むしろ今さっきの絃汰のマニアック過ぎる発言を聞いて微妙に『思い直す必要があるかも?』つて思い始めたところなんだけど」

「——え? い、いやだなくむにさん。今さっき言ったのはジョークだよ。絃汰くん流の場を和ませるためのジョーク発言。なんつーの? エスニックジョークとかそんな感じに分類されるやつ。ちよつと解り辛かつたかな。いや、すまそんすまそん」

「……………」

「……………すいません。調子に乗つて変なことを言いました。ふざけ過ぎました。若さゆえの過ちつてやつなんです。反省してます。ごめんなさい。むにさんが不快に思つたのなら本気で謝りますので。謝りますので。どうか。どうか、穏便に済ませてください。つてか、マジで通報しないで! お願い!」

完全に生ゴミでも見るかのようなむにの視線に流石に茶化せる状況ではないと悟つた絃汰だが、更に無言のままスマホを取り出すむにを見て一気に心臓が止まりそうに

なった。怒涛の如き謝罪と反省の言葉を繰り返して、頭を下げ、最後には必死さのあまり若干涙声で悲壮感すら漂う感じでもって許しを懇願する始末。最近は何を下げることが多い気がするが、今回のこれは今までのそれとは違う。下手したら紘汰の今後の人生がかかっている。

「紘汰」

「はい！　なんでございましょう！」

むにの声に最早脊髄反射の如き即時反応を見せる紘汰。下げていた頭を振り上げ、むにへと向けた顔はきつと蜘蛛の糸を掴もうとするカンダタが浮かべていたものと同類のもの。

「わたし——つと、誰よ？」

何かを言いかけたむにだったが、タイミング悪くかかってきたスマホの着信によって中断。画面を見て「ママ？」と呟くと、紘汰に断りを入れるとベンチから腰を上げて少し距離をとってから電話に応じる。

（むにのママさん？　こんな時間に電話とか珍しいな）

むにとはそれなりに一緒にいることの多い紘汰だが、仕事が忙しいらしいむにの母親から真つ昼間に電話がかかってきたのを見たのは初めてだった。

「——うん。うん。わかった。じゃあ、ママ。またあとでね」

数分ほどの会話を終えて通話を切ったスマホから耳を離し、一拍置いて絃汰の方を向きなおしたむには先程までとは随分違う表情を浮かべていた。

具体的には、

(ママさんのことで何か良いことあったのかな?)

と、絃汰が容易に察することができるレベルで表情の端々から嬉しそうな気配が滲み出ている感じ。

「絃汰。寛大で優しいむにちゃんに感謝することね。わたしはただの失言にグチグチと文句を言ったり責めたりはしないわ」

「それはありがたい。むにの寛大さに感謝だな」

「そうよ。感謝しなさい」

機嫌が良いのならばそれに越したことはない。天の助けとなったむにママに絃汰は心の中で本気の感謝をしておく。

「それで勉強のお礼の件だけど……どうしようかしら? 特に今はして欲しいこととか

……あつ、でも、日曜日に……いや、でもあれは……」

「何? 日曜になんかあんの? どっか行くつもりだったとか?」

「……そうよ。でも、そもそもわたし一人で行くつもりだったし。多分、絃汰は興味がな
いことだろうし」

齒切れの悪いむにの物言いだが、口出すということは少なくとも一緒に行くのが嫌だというわけではない——と、紘汰は都合のいい解釈をすることにする。

「おいおい、むにさんや。悲しいこと言うなよ。お礼なんだから、それがどんなことでもちゃんと付き合うぜ俺は。てか、そもそもお礼とか関係なしに、友達が興味あるつて言うところと一緒に行くのにいちいち文句を言ったりはしないから」

「……………そう」

（あれ？　なんか変な反応だな？）

返答に微妙な間があつたかと思うと、むには何故か不思議な表情でもつて紘汰を見てきている。

（喜んでる？　呆れてる？　怒って……はないよな？）

女の子と言う生き物はどうしてこうも時々どう表現していいのかわからない類の表情のするのか——そんな疑問を抱きながらも、「何か余計なことでも言っちゃまったかな？」と我が身を振り返ってみる紘汰だが、特に思い当たる節が無い。

「——まあ、いいか」

「なんだよ？　なにが『まあ、いいか』なんだよ？　俺っち、気になるんだけど？」

「別になんでもないわよ。こつちの話。——で、次の日曜日は時間あるの？　あるのならちよつと付き合いなさいよ」

何か自己完結した様子のむにが一転して強気な態度になったことで、絃汰としてはもうお手上げ状態で応じるしかない。

(考えてもしやーねーか)

「どうするのよ?」

それに、さっさと返答をしないと折角好転したむにの機嫌がまた悪くなりかねない。

「お供させていただけこう。特に予定も無かったからな。そんじやまあ、とりあえず俺はてるてる坊主を大量に用意しておくわ」

「てるてる坊主? なんでもそんなものがあるのよ?」

「晴れるように。土日の天気が曇り時々雨だったし」

今朝見た週間天気予報ではそうだった。梅雨の季節。対抗するには昔ながらの願掛けしかない。

「マイナス800ポイント」

「なんでっ!?!」

唐突な謎のマイナス評価。しかも結構高め(?)の数字に思わず絃汰の叫びが飛ぶ。

「空気の読めない情報で折角のいい気分が台無しになったから」

「それは流石に理不尽過ぎじゃないっすか!?!」

「なによー。文句あるの? 更にマイナスになるわよ?」

「えつと……すんません」

むにの妙にノリノリな様子でのワガママお姫様モードになにも言えなくなる。

(女子つて、時々妙に逆らい辛い状態になるよな。それもいきなり)

その後、「で、どこ行くの?」「秘密」「何かする感じ?」「秘密」といったやりとりを延々と繰り返しながら昼休みが終わるまでをダラダラと過ごした結果、5限目が移動教室だったことを完全に失念していた紘汰は見事授業に遅刻することになった。

☆☆skitt☆☆

「その唐揚げ美味そう。一個ちよーだい」

「嫌よ。自分で買いなさいよ」

「お金がないです! だから購買オリジナル販売の安くてデカイパンしか買えません!

うまいからいいけどね!」

「金欠なんだったら、購買で買わずにお弁当にすればいいんじゃないの? そうすれば好きなおかずを入れられるでしょ」

「むにさんや。無理言わないでくれやす。俺にお弁当なんか作れるわけがないじやろが」

「なんで自分で、なのよ。お母さんにでも頼んで作って貰えばいいじゃない。中学の時は作って貰ってたでしょ」

「それがこの春から仕事が忙しくなったらしくて、朝早くから仕事に行くことが増えてさ。おかげで『高校生になったんだから自分のお弁当くらいは自分で作れ。自分のことは自分でしろ』って言われた。酷くね?」

「それは仕事なんだし仕方ないでしょ。むしろ、頑張ってみたら?」

「え、でもなく。まあ、料理できる系の男子つても多少憧れはするけどさ」

「最近は何となくか芸人でも料理好きを公言している人も多いし、いいんじゃない?」

「むにはどうよ? 料理できる系の男子。どう思う?」

「あたしはどっちでも……。料理ができるに越したことはないと思うけど」

「確かに。今度チャレンジしてみるか。でも……。俺が唐揚げを食べたいのは今なんだよな」

「三日坊主にならないことね。それから……。一個だけだからね」

「何!? くれんの——ッ、アガツゴオツ!? うぐ……。むぐ……。つくん……。ふ。って、いきなり口突っ込んでくるなよ!」

「え？ 文句？ むにちゃんかわざわざ食べさせてあげたのに文句？ 感謝の言葉じゃなくて？」

「いや、動物の餌付けじゃないんだからさ。普通に渡してくれよ。普通に」

「紘汰。感謝の言葉は？」

「えーと、むにさん。俺の話聞いてます？」

「紘汰ア？」

「イエス！ むに様！ 唐揚げを食べさせていただきましたまして、ありがとーございまーす」

Andante Mix
～シュガーソングとビター
ステップ～

「じゃあ、明後日に最終確認ということだ」

「オーケー、オーケー。いやゝ悪いね、日曜日なのに呼び出しちゃって。その上こつちのお願ひまで聞いて貰っちゃって」

「いえ、大丈夫です」

陽葉学園内放送室で行われていた打ち合わせを終え、真秀は放送部の先輩DJであるミサミサと一緒に校門に向かって校内を歩いていった。

「急だけど週明けの水曜日と木曜日の2日間をよろしく」

「はい！ 任せてください。頑張ります！」

「おお♪ 熱いねエ♪ やっぱニューカマーはこうじゃないとね♪ ガンバレー」

「あつ、いや……はい。が、頑張ります」

意気込んで答える真秀の様子が面白かったのか、楽し気に笑うミサミサに急に恥ずかしくなって一気にトーンダウンする。

「それで、この後はなんだけど。何か予定あるかな？ 他の放送部の子達と合流してお昼を食べに行く予定つもりだから、折角だし一緒に行く？」

「え〜と……すみません。この後はちよつと予定がありません」

「アツチャク。それはザンネン」

思わずスマホを入れている制服のポケットへと視線を送る。

真秀としても折角の学校の先輩のお誘いだから付き合いたい思いはある。だが、つい先程『あと30分くらいで用事が終わる』と待ち合わせ相手にメールを送ったばかりだった。流石にこの後に昼食に付き合うともなれば30分程度では済まないだろう。

「しょうがない。ニューカマーとのスキンシップタイムはまた今度の機会につてことにしよう。あ、気にしなくてオーケーだから。また誘うからね」

「はい、よろしく願います」

後輩が先輩の誘いを断るといふのは何とも居心地悪いものだが、こればかりは仕方がない。胸の内の真意までは読めないとはいえ、それでもお誘いを袖にされたミサミサがあまり不快そうな様子を見せなかったことは多少の安堵へと繋がったが。

「そう言えば、明石さんの今の校内で推しとかある？ あ、これはオフレコの会話だから。放送部としての中立性を守るのと、個人的な推しは別の話だから気にしないでいいからね」

「そうですね……私としては——」

真秀の内心に気を遣ったのか、分かり易く話題を変えてきたミサミサ。その心遣いに感謝しつつ、真秀は厚意に甘えると同時に純粋にDJ好き同士としての会話に花を咲かせることにする。

「——意外です。そっち系も好きなんですか」

「そうそう。この学校だとあんまりいないタイプだけど——なんだろう？　なにか騒がしい？」

お互いの推しやら好きなジャンルやらを話し合いながら校門付近まで来た二人だが、時折すれ違う生徒達の様子がおかしいことに気づく。何やら少々興奮している様子で会話している子達がチラホラ見られ、その比率が校門に近づくにつれて増しているのだ。

「何かあったんですかね？」

「会話の断片を聞く限りだと、誰かが校門付近で人待ちをしてる？　これは……面白いことが起きそうな予感☆」

詳細は分からないにもかかわらず楽しそうに笑いながら歩行の速度を上げるミサミサ。真秀としてはなかなか自由な先輩に対して苦笑と相槌を打ちつつ後を追うしかない。

「お！ あれかな？ 噂の待ち人さんは」

辿り着いた校門。そこから少し校外へ出た先にいる青年が件の人物らしい。

深いパープリッシュブルー仕様の大型バイクを道路の端に寄せて駐車し、ブラウンのレザージャケットを着た青年がシートに軽く腰を預けながらスマホを弄っている。

（あれ？ あのバイクどこかで……って!?）

スマホへ落としていた視線を上げて真秀達の方へと向けた青年——茅の視線が真秀の姿を捉える。

「真秀！」

（ち、茅兄いイイイ!??!）

軽く手を振って声を掛けた後、バイクから離れて真秀達の元へと歩いてくる茅だが、真秀としてはそんな彼に対して現状を理解できずに混乱した心の中で絶叫していた。

（な、なんで学校に!? 駅の方で待ち合わせだったはずなのに）

「早かったな。メールだと30分くらいってあったからもう少し待つかと思ったけど」
「え、えくと。どうしてここに？」

「知り合いの店にちよつと顔出ししてただけど、近かったからそのままな。——こんにちは」

「ハイイ。こんにちは♪」

疑問しかない真秀の問い掛けに特に大した理由のない答えを返し、傍らにいたミサミサへと挨拶をする茅だが、初対面の年上の男性に対しても特に物怖じせず笑顔で返してきたミサミサの様子に思わず吹き出してしまう。

「ははは、ノリのいい子だな」

実は多少気は張っていたのだろう。ミサミサに警戒されなかつたことで若干肩の力が抜けた様子の茅だが、そんなことに気がつかないくらい真秀の心境はいろいろと大変だった。

それと言うのも、

「なにあれ？ 彼氏のお迎え？」「いいなく。年上の彼氏。羨ましい」「あの子、一年？

要注意ね」

(マ、マズい……)

否が応でも聞こえてくる周囲からのヒソヒソ話。そして向けられてくる幾多の視線。

平日と違って人の数自体は圧倒的に少ないとはいえ、各種活動が盛んで休日でも校内施設が使える陽葉学園には日曜日であってもそれなりに生徒がいる。しかも今は昼時。登下校する生徒だけでなくお昼を校外に食べに行こうとしている生徒なども今この瞬間に校門近くには何人もいたりする。

そして何よりの問題は、陽葉学園は少し前まで女の園——女子校であった。今は様々

な事情から高等部のみ男女共学となったが、それでも全体の男女比率は圧倒的に女子が多いのだ。

つまり、

(変な噂が流れたら私の高校生活が終わる!!)

いろいろと女子特有の面倒なことがあるのだ。

クラスメイトの男子と親しく会話する程度とかならばともかく、こんな思春期女子の好奇心をあからさまに刺激するシチュエーションとかはいろいろとマズい。非常にマズい。人目がなければきつと本気で頭を抱え込んでいたことだろう。

「ねえ、明石さん。この人、明石さんの知り合いだね?」

「え? は、はい。そうです」

ミサミサの真秀にだけ聞こえる音量での囁きが若干現実逃避しそうになっていた真秀の意識を叩く。

「彼氏?」

「??? なっ!?! い、いえ! 茅兄いは——」

「〃にい〃? ——ああ、お兄さんってこと? 予定があるって、お兄さんとのことだったんだ。それにしても、わざわざ妹を迎えに来るなんて随分と仲がいいんだね」

「お兄さん? あっ……そ、そうです! 兄なんですよ」

真秀の言葉尻を捉えてのミサミサの勘違いだったが、これ幸いと便乗することにす。若干声を大きくして——周囲の人間に聞こえてもいらいの音量で肯定の言葉を返す。ついでに、真秀の『兄』発言に口を開こうとした茅に向かつて「余計なことを言わないで！」との意思を込めた視線を送って牽制も行っておく。

(ツ!!? な、なんだ!?! 真秀!?)

効果は抜群だったようで、一瞬とは言え真秀からの強烈な気迫を感じ、思わず口を噤む茅。瞬時に理解する。今は下手に口を開いてはいけない。

「この後に一緒に出掛ける予定だったんですけど、わざわざ迎えに来たみたいで。過保護ですよ。あはははは」

「へえ、お兄さんか。……ちよつと好みかも」

(ん?)

「あれ? でもこの人、どこかで見たような気が……」

誤魔化しの笑顔を浮かべながらこの場をさっさと切り抜けようとする真秀だが、茅の顔を見て首を捻っているミサミサからの微妙に聞き捨てならない台詞が聞こえたことでその笑顔が固まる。

「あ、あの〜ですね……」

「ねえねえ、明石さん。突然だけど、お願いを言ってもいい? とゆーか、ぶつちやけて

言うけど、『お兄さんのことを紹介して?』とか言ったら怒る? ダメ?」

「しようかい? 紹介?……え、ええっ!? いや、だって、茅兄いは。あの、その……」
ミサミサの突然すぎる台詞。その内容と意味を理解し、一気にパニックになった真秀は見事な百面相を披露することになる。

「——ぷっ。ふ、ふふふ」

そして、そんな後輩の様子を見て吹き出す先輩。

「いや、ごめん。冗談だから。とゆうより、いくらなんでも慌て過ぎ」

「じよ、冗談? ああ、冗談ですか。あは、あははは」

人の悪い先輩に見事にかかわられたのだと気づき、真秀もまたミサミサの笑いに合わせるように笑い顔を浮かべておく。

(そ、そうだよ。冗談だよ。よ、よかった)

「なるほど、明石さんは結構ブラコンなんだね。——それはそれで面白いかも」

(な、なんだろう。なんだかあんまり安心できない気がする)

妙に意味深な笑みを一瞬浮かべた気がするミサミサに漠然とした不安を感じつつも、これ以上下手なことを言うともた厄介なことになりそうなのでグツと我慢する真秀。この数分間のやりとりのせいで将来的に胃に穴が開くかもしれない。

「それじゃあ、あんまり明石さんを揶揄い続けるのも悪いし。時間も時間だしね。今日

はここで。週明けにまた」

腕時計で時間を確認したミサミサは、黙って様子見をしていた茅に「これから友達と予定があるので、お先に失礼します」と意外と礼儀正しく告げると校舎の方へと踵を返す。

「おつかれさま」

「お、おつかれさまです」

軽い会釈で見送りをした茅に向けて最後に一度だけ笑みを浮かべると、校舎の方へと戻っていくミサミサ。ただ、去り際に小声で、「また今度お兄さんのことを聞かせてね♪」なんて微妙に不安になる台詞を真秀に残してはいったのだが。

「明るい子だな。リボンの色が違ったから先輩か？」

ミサミサが去ったことととりあえず大丈夫と判断し、茅はようやく口を開くことにする。

「そう、放送部の先輩でDJもしてる……って、そうじゃなくて！ 茅兄い、なんでここにいるの!？」

『『なんで』って、さつきも言っただろ。近くまで来てたからそのまま寄ったって。マズかったか？ 部外者だし、下手して不審者に間違われたりしないように校門から少し離れた場所で待ってたんだが』

(氣を遣つてくれてるのは分かる。分かるけど、うちの学校は元女子校なんだからもうちよつとそつち方面の影響も考えて欲しかったよ)

高等部が共学化したとは言つても最近のことでもまだ女子校だった頃の空氣が残つて
いる陽葉学園である。

茅がそれなりに氣遣いもちゃんとできるタイプの人間だということは真秀自身が一番よく知つてゐるが、それでも高校は男子校に通つていた目の前の青年に女子校の空氣や考えを理解するのは難しいのかもしれない。まあ、普通に共学の学校でも年上の若い男性が女子生徒を校門前まで迎えにくるといふシチュエーションはそれなりに話題になることだと認識できそうな氣もするが、そこは個々人の認識の違いにもよるところと言つた感じだろうか。

「と、とにかく行くー！ ほら、早くー！」

これ以上衆目の的になるのは御免こうむりたい。茅の背を押すようにして移動を促し、真秀は少しでも早くこの場からの脱出を図ることにする。

「ところで真秀。先に謝つとく。すまん」

「え？ なに？ 急にどうしたの？」

駐車しているバイクを目指しての移動中に突然の謝罪。茅から謝罪される意味が分からず、当然ながら真秀は困惑する。

「いや、普通に失念していたんだ。で、今更ながら気づいたんだけど、今の真秀の格好は制服で、下はスカートなんだよな」

「そうだけど？」

「普通にバイクをMT-09で来ちやつたから。シート高の低いランプレッタならまだましだったんだけど、こいつだとその……真秀の今のスカートの長さだとちよつと……」

「……あつ」

視線を逸らしながら言い辛そうに口にした茅の台詞。すぐにその意味に気づき、真秀もまた思わず視線を茅から逸らしてしまう。

(ど、どうしよう……)

いつも通りと言えбайいつも通りなのだが、真秀のスカート丈は完全に膝上であり、目にも眩しい健康的な太腿がハッキリ見えるくらいの長さである。つまり、シート高のあるバイクのシートに跨ると傍から見結構ギリギリな感じになってしまう。下手すると、見える。それは困る。ボーイツシユな雰囲気や言動の多い真秀だが、中身は至って普通の花も恥じらう女子高生である。当然ながら下着を人に見られるなど言語道断だった。

(でも、相手がちがY——じゃない!! 何考えてんだよ、私!!)

恐ろしい方向に脱線しそうになった自身の思考に急停止をかける。

「バイクはどこかに預けて電車で行くつて手もあるけど、店の場所が駅から結構離れたところにあるんだよな。真秀がもしどこかで待つててくれるなら一度家に戻つてバイクを換えてくるけど……流石に待てないよな？」

学園から自宅まで。電車やバスならともかく、バイクでの往復の移動時間がどれくらいかかるのかは真秀には分からない。だが、流石に10分や20分くらいでは無理だろう。交通事情によつては1時間くらいは覚悟しておいた方がいいかもしれない。

「マジですまん。俺の気が回つてなかつた」

申し訳なさそうに頭を下げる茅だが、真秀としては特に気にしていない。むしろ、何か良い対策案はないかと考える。

（あ、そうだ。別に難しく考える必要はないじゃん）

「茅兄い。このパーカー。これを腰に巻けば大丈夫なんじゃないかな？」

制服のブレザーの下に着ているパーカー。そのフード部分を軽く抓む。

「ああ、確かにそれなら。けど、いいの？ 皺になつちまうけど？」

「いいよ、別に。私は特に気にしないし」

何より、真秀的にはこのまま折角の予定がおじやんになつたり、一緒にいられる時間が短くなつたりしてしまうことの方が問題だった。

「茅兄い、少しだけ持って貰っていい? ——つと。こんな感じで大丈夫かな?」

脱いだブレザーを茅に預け、手早くパーカーを脱いで腰に巻き付ける真秀。

「まあ、大丈夫…だ…ろ…」

「茅兄い?」

何故か急に言い淀んだかと思うと、何とも微妙な表情を浮かべる茅。

「……いや、なんでもない。気にしないでくれ」

「そ、そう?」

そして、どういうわけかあからさまな視線逸らし。何か問題があったのかと真秀は自身の体を見してみるが、特におかしな様子はない。着ているのは制服だし、服がどこか汚れているわけでもない。パーカーを着ていたことで蒸れていたのか、白シャツが多少肌張り付く感じにはなっているが。

「——っえ!? もしかして私の下着…透けてる!?!」

思わず赤面ものの事態が頭を過る真秀。

今日の柄は? 色は?

茅と出掛ける以上は変なモノは着けていなかっただけは—but

(いやいや、自意識過剰かよ! 私なんかのなんて、茅兄いが興味持つわけ……)

すぐに思い直し、同時に沸き上がる妙に卑屈な考え。自嘲の混じった仄暗い笑みすら

浮かんでしまう。

「真秀？」

「何？ 茅兄い、どうかした？ あ、ブレザーを持って来てくれてありがとう」

「どうかしたか？」と顔に書いてある茅に心配されないよう、真秀はすぐに思考を切り替えて表情を取り繕う。笑顔を浮かべて茅に預けていたブレザーを受け取る。

「ちよつとダサイよね、これ」

ブレザーを羽織り、腰に巻いたパーカーの位置を整えると、そのチグハグな感じに真秀の口から素直な感想が漏れる。

「それは仕方ない。バイクに乗ってる間だけ我慢してくれ」

あえて口にはしなかったのだが、茅自身も微妙に思っていたこと。それを真秀が言及したことに苦笑しながらもヘルメットを真秀に渡すと、茅も自身のヘルメットを被る。

「よし。とりあえずは……昼飯だな。それからモンブランの店だ」

エンジンを始動しながら、真秀にタンデムシートに座るよう促す。

「真秀、ちゃんと掴まってるよ？ 乗るのは久し振りだろ」

「大丈夫。でも、できるだけ安全運転でお願い」

「当然」

タンデムシートに座った真秀の手が茅の腰へとしっかりと回されたのを確認し、一瞬

だけ浮かんだ健全な男性特有の邪な考えを軽く頭を振って追い出すと、茅は運転に集中することにする。後ろに大事な子に乗せているのだ、万が一などあつてはいけない。

「じゃあ、行くか！」

「オーケー！　ゴー！」

走り出すバイク。

久々の乗車のせいかヘルメット越しでも分かるくらいに明らかにテンションが上がっている真秀の声を背中に受け、触発されてテンションの上がつた茅は一気にバイクを加速させた。